

「百匹の羊と十枚の銀貨」

ルカの福音書 15:1~10

はじめに

【新改訳 2017】ルカ 8:10

イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』 するためです。

イエシュアのたとえにはすべて「神の国の奥義」が秘められており、イエシュアの弟子だけがそれを知ることが許されているとイエシュアは言われました。今日の箇所もまたそのようなたとえが記されています。そこから私たちに許されている「神の国の奥義」を読み解いてまいりましょう。「すべての真理に導いて…これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます (ヨハネ 16:13)」真理の御霊の助けがありますように、イエシュアの御名によって。

1. 取税人と罪人

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:1 さて、取税人たちや罪人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。

15:2 すると、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。

イエシュアの御言葉すなわち御国の福音を聞くために「取税人たちや罪人たち」がみもとにやって来たのとあります。ユダヤ人の指導者たちはこれを「一緒に食事をしている」と表現し、またしてもここに 13 章、14 章にあった食卓、宴会を思い起こさせる記述があり、イスラエルよりも先に異邦人を招き入れる「神の国」の食卓にたとえられた神のご計画が指し示されています。そしてここでは貧しい人やからだの不自由な人 (ルカ 14:13) ではなく「取税人たちや罪人たち」が主に招かれる者、救われる者の「型」として挙げられています。この取税人とは当時のイスラエルを支配していたローマに納める税を取り立てる人のことで、不正にだまし取ったり、脅し取ったりして私服を肥やすために忌み嫌われていたようですが (ルカ 19:8)、この取税人についてヘブル語の視点で捉え、考えてみますと、彼らの徴収する「税」メヘス (מֶחֶס) とは本来、イスラエルの「主への貢ぎ物」として異邦人から分捕った中から選ばれた物 (民 31:28) を指す言葉で、それはつまり異邦人の中からイスラエルの主のものとして選び出され、救われるべき者たちを集め、主にささげるという存在、それがこの「取税人」という存在に秘められた神のご計画の「型」であり、それはまさに終わりの日、大きな患難の中で異邦人に御国の福音を宣べ伝え、大勢の国々の民を主イエシュアの御座へと捧げる、送り出す 144,000 人のイスラエルの残りの者がこの「取税人」の存在には指し示されているのです。終わりの日、獣と呼ばれる反キリストが全世界を支配することにより、これに逆らってイエシュアをまことのキリストすなわちメシアとして福音を宣べ伝えるイスラエルの残りの者

は、獣に従うすべての人々から忌み嫌われ、迫害されます。まさに取税人たちが罪人と揶揄され忌み嫌われたようになるのです。このように、ここでの「**取税人たち**」とは終わりの日に起こされるイスラエルの残りの者の「型」なのです。

また「**罪人たち**」についても同様に考えてみますと「罪」とはハッタアト(תַּחַת)といいますが、この初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

4:7 もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」

これは主がアダムの子カインに語られたものです。彼は兄弟アベルとともに主にささげ物をしましたが、主はアベルに目を留め、カインを拒絶されました。それはまさにここに語られた「**罪**」のように「戸口で…伏せている」者、つまり拒絶され家の中に入れてもらえず、戸口の外で倒れこみ、家の中に入れてもらうことを「恋い慕う」飢え渴く者です。このように、ヘブル語が示す「**罪**」罪人とは悪、悪人と同じではありません。その悪の中から救い出され、神に赦され、受け入れられること、主のあわれみを求めてひれ伏し、まさに主を恋い慕う者を指すのです。ですからこの「**罪人たち**」とは私たち教会のように、イスラエルの家の外に置かれていた民、異邦人でありながら、この家に入る、すなわちイスラエルにつながることを求め、イスラエルの主を慕い求め、そして御子イエシュアのみもとに導かれていく異邦人を指し示しているのです。今日、全世界のクリスチャン人口は約 23 億人とされていますが、終わりの日にも大勢の国々の民が起こされ、以下のようになることが預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

「大きな患難」と呼ばれる終わりの日、神によって「十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押され」御国の福音が全世界に宣べ伝えられます（マタイ 24:14）。その結果「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆」がイエシュアを信じ、この「大きな患難を経て」すなわち死んでよみがえり、天の「御座の前と子羊の前」にまで引き上げられます。このイスラエルの残りの者とも呼ばれる「十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者」と「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」この二つの存在がここでの「**取税人たち**や**罪人たち**」の存在には指し示されており、つまり彼らがイエシュアの「話を聞こうとして…近くにやって来た」そして「一緒に食事をして

いる」という記述には終わりの日に起こるこのような壮大な神のご計画が指し示されており、単なる状況説明でも、ただの「文句」などでもないということをご覚悟ください。このように、聖書は預言書です。記されているすべての記述に神の御心、ご計画が指し示されている、「神の国の奥義」が秘められているのです。そして、今解き明かしたこの神のご計画を覚えながら、次に語られたイエシュアのたとえも読み解いてまいりましょう。

2. 九十九匹と一匹の羊

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。

15:4 「あなたがたのうちのだれかが羊を百匹持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。

15:5 見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、

15:6 家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うでしょう。

15:7 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。

これはイエシュアのたとえの中でも特に有名で、児童絵本の題材にもなっているほどです。しかしその前に、イエシュアは「たとえを話された」とありますが、この言葉もヘブル語で見ると非常に重要な一文です。「たとえ」という意味のマーシャル(מִשְׁלָה)は本来「支配する、治める」という意味のマーシャル(מָשַׁל)がその語源なのです。つまりイエシュアはたとえを話されたのではなく「イエシュアはこのようなして統べ治められる」と宣言されている一文なのです。ですからイエシュアのたとえは常にそのご支配、統治の現れである「神の国」を指し示しているのです。ですからそれがどのようにしてなされるのかという視点でこのたとえを見ていきましょう。

まず「九十九匹」という数について。この数は旧約聖書では以下の二箇所にしか使われていません。

創世記【新改訳 2017】

17:1 さて、アブラムが九十九歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。

17:24 アブラムが包皮の肉を切り捨てられたときは、九十九歳であった。

このように「九十九」とはイスラエルの父祖アブラムを指し、主の御前に歩む、全き者、割礼を受けた主のもの、聖なる者、そして選びの民としての彼の子孫すなわちイスラエルの民を指す数字なのです。これをイエシュアは「悔い改める必要のない九十九人の正しい人」と解き明かしておられますが、この「悔い改める」という意味のシューヴ(שׁוּב)は本来「土のちりに帰る(創 3:19)」ことすなわち肉体の死を意味する言葉なのです。また「九十九匹を野に残して」とたとえられていますがこの「野」と訳されているも

のは正確には「荒野」と訳すべきミドゥバール(מִדְבָּר)です。まさにこの荒野のような過酷な状況下に置かれ、しかし神の印を受けることで守られ（黙 7:4）、肉体的に死ぬことなく主の統治、支配である「神の国」に入って行く民、それはもちろん大患難を生き残る 144,000 人のイスラエルの残りの者です。この「九十九匹の羊」とはまさに彼らの存在を指し示しているのです。だとするならば「大きな喜びが天にある」とたとえられた、失われるはずだった、滅びるはずだった「一匹」の羊「一人の罪人」とはもちろん天の子羊の御座の前に立つ異邦人たち「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」を指しているということはいままでの通りありません。このように解き明かすことによってこのたとえははじめてマーシャル「支配、治める」という意味として語られていることになるのです。

3. 十分の一の銀貨

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:8 また、ドラクマ銀貨を十枚持っている女の人が、その一枚をなくしたら、明かりをつけ、家を掃いて、見つけるまで注意深く捜さないでしょうか。

15:9 見つけたら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『一緒に喜んでください。なくしたドラクマ銀貨を見つけましたから』と言うでしょう。

15:10 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」

この「ドラクマ」は旧約聖書では「ダリク」と訳されているペルシャやギリシャの通貨すなわち異邦人の通貨ですがイスラエル内でも使われていました。それが「十枚」とは何を指すのかということ、先ほどのたとえの意味を踏まえるならばこれは十人の正しい人ということになるのですが、この意味を理解するには以下の箇所を見る必要があります。

創世記【新改訳 2017】

18:20 主は言われた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い。

18:21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおり、彼らが滅ぼし尽くされるべきかどうかを、見て確かめたい。」

18:22 その人たちは、そこからソドムの方へ進んで行った。アブラハムは、まだ主の前に立っていた。

18:23 アブラハムは近づいて言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。

18:32 また彼は言った。「わが主よ。どうかお怒りにならないで、もう一度だけ私に言わせてください。もしかすると、そこに見つかるのは十人かもしれません。」すると言われた。「滅ぼしはしない。その十人のゆえに。」

天からの硫黄と火によって滅ぼされた町ソドムとゴモラ、その出来事の前には主とアブラハムのこのような会話がありました。ここに「十人」の「正しい者」の存在が話されています。しかし実際には一人の

「正しい人、義人」と呼ばれるロト（Ⅱペテ 2:7）だけが救い出され、町は滅ぼされました。ここに十枚の銀貨のうち一枚を見つけるというたとえとの結びつきがあります。イエシュアのたとえはこの事実を指し示した上で、終わりの日とはソドムとゴモラに起こったような滅びの日であることが表されているのです。

またこのたとえの中で女の人は一枚の銀貨を見つけるために二つのことをしています。一つは「**明かりをつけ**」たということです。ここに使われているヘブル語ネール(נֵר)は本来、幕屋、神殿に置かれた七つの灯が上に掲げられた燭台(メノーラー)を指す言葉です(出 25:37)。そしてヨハネの黙示録 1:20 によるとそれは私たち教会を指していることがわかります。私たち教会が燭台のように上に上げられ輝く時、それはよみがえりの時、携拳の時です(Ⅰテサロニケ 4:16、17)。そしてその時女の人が「**家を掃**」くとたとえられた出来事が起こります。

イザヤ書【新改訳 2017】

14:22 「わたしは彼らに向かって立ち上がる。——万軍の主のことば——わたしはバビロンから、その名も、残った者も、子孫も末裔も絶ち滅ぼす。——主のことば——

14:23 わたしはこれを針ねずみの領地、水のある沢とし、滅びのほうきで一掃する。——万軍の主のことば。」

14:24 万軍の主は誓って言われた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの図ったとおりに成就する。

このように終わりの日、主イエシュアは地上再臨され、獣と呼ばれる反キリストの帝国「バビロン」を滅ぼされます。その事実が女の人が「**家を掃**」たというたとえには表されているのです。「一掃する」という意味のティウテー(טִוְטֵ)が使われている唯一の箇所が上記の預言です。そして女の人はついに失った一枚を見つけ出します。この十分の一枚の銀貨が指し示すものは以下の預言の成就です。

創世記【新改訳 2017】

28:11 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

アブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルは上記の夢と主の御声、そのご計画を聞き、それが成る日「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます」と言いました。これがイエシュアのたとえが指し示すマーシャル「主の統治、支配」の現れです。このように女の人が見つけた、失われていた十分の一枚の銀貨とはアブラハム、イサク、ヤコブの神であられる主が彼らに約束された「神の家」「神の国」としてのイスラエルの建国とそれによって地のすべての国々の民が祝福を受けるという神のご計画の成就を指し示しているのです。

4. たとえを用いて

今日取り上げたイエシュアの二つのたとえには、終わりの日に起こされる存在、出来事がすべて表されていました。まとめますと

- ①九十九匹の羊…144000 人のイスラエルの残りの者
- ②一匹の羊…だれも数えきれない大勢の群衆
- ③明かりをつける…携拳される教会
- ④家を掃く…反キリスト、大バビロンの滅亡
- ⑤十分の一の銀貨…「神の国」の完成、成就

となり、終わりの日に起こされる存在と、起こる出来事としての神のご計画のすべてが見事に表されている、たとえられているのです。このようにイエシュアのたとえには「神の国」へと至る終わりの日におけるご計画が奥義として秘められているのです。私たち教会は今日こうして御国の福音を宣べ伝え、発信していますが、終わりににはイスラエルの残りの者が起こされ、彼らこそが大胆に、明確に、力強くこれを全世界に宣べ伝えて行きます。つまり私たちは彼らの「型」であり私たちのこの働きはまさにマーシャル、たとえなのです。ここにイエシュアが常にたとえを用いられたという真理が同様に働いていると言えます。私たち教会は来たるべき主イエシュアに用いられる一つのたとえ、御国の福音を宣べ伝える者の「型」として、これからともに歩んでまいりましょう。私だけが働き、語っているではありません。ここにいる一人ひとりが主に呼び集められ、つながることによってこの教会の歩みは保たれているのです。どうぞこれからも主がこの御国の福音のために集まる、つながる一人ひとりを守ってくださいますように。